

2023年3月26日説教「盲人と世の光」

ヨハネの福音書9章1～12節

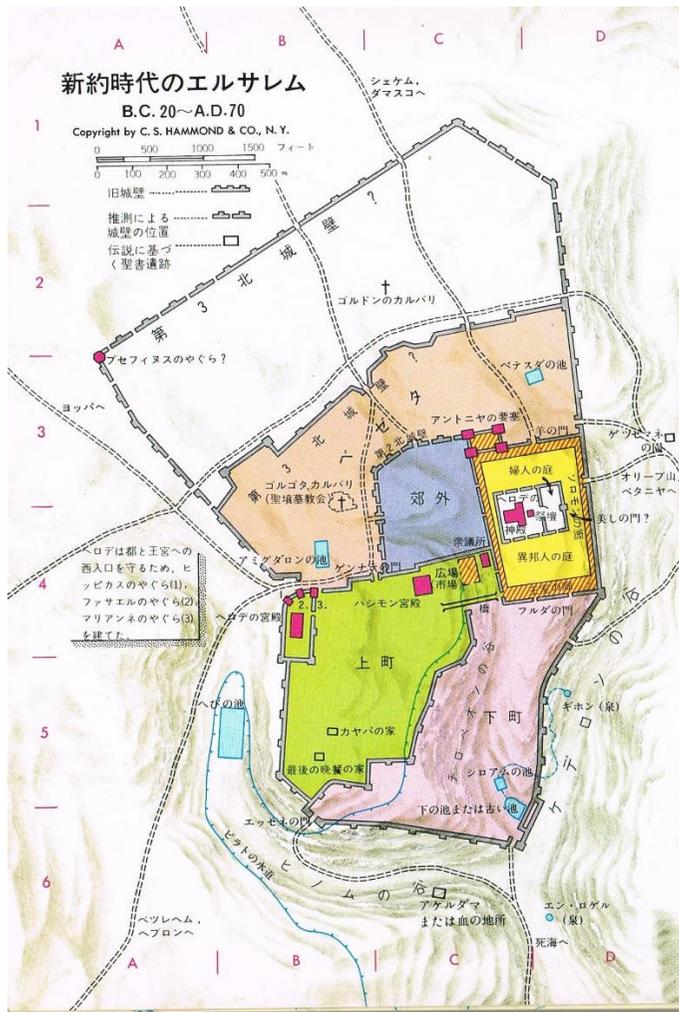
この説教は2021年7月25日に語られたものです。「わたしは世の光」と主イエスが言われた点に関連して、9章から学んでいきましょう。

1. 道端の盲人 (1～3節)

- ①盲人 (1) 「またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。」ユダヤの道を歩く途中でした。そこに生まれつきの盲人がいたのです。盲人についての記事の中では、バルテマイのように名前が出されている場合があります(マルコ10:46～52)。しかし、ここではただ盲人とあるだけです。その盲人にイエス・キリストは目を留められたのです。
- ②だれの罪が (2) 「弟子達は彼についてイエスに質問して言った。『先生、彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。』」すると、弟子達が質問しました。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか」。これはなかなか、言い出しにくい質問です。仏教の言葉に「因果応報」があります。人は良い行いをすれば良い報いがあり、悪い行いをすると悪い報いがある。前世における善悪の行為が、現在において善悪の結果がもたらされるというものでありましょう。私もこの国にあって育ち、一度はそのような考えに接したことがあります。ここでもイエスの弟子達が、このような質問をしているということは、律法を援用してこのような考え方を持ったのでしょうか(参照9:34)。盲目という不自由は、誰の罪の故だろう、本人に因があるのか、それとも両親に因があるのだろうかという重大な質問です。
- ③神のわざが (3) 「イエスは答えられた。『この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです』」。これに対する、主イエスのお答えは、弟子達の発想や考え方とは全く異なるものでした。つまり、彼が盲目なのは、彼の罪にも起因せず、また両親の罪にも起因しないということです。それでは、何ゆえに? それは、このことを通して、「神のわざがこの人に現れるため」だということです。どういことでしょうか。なんであれ、このことに神が圧倒的に関わってくださっているし、神は何事かをなさうとしてくださっているということです。

2. わたしは世の光です (4～7節)

- ①昼の間に (4) 「わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行わなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。」「わたしたちは」というのは、イエスと弟子たちのことでしょうか。弟子達にしてみれば光栄なことですね。「わたしたち」は主イエスを遣わした父なる神のみわざを、終わりの日の前にしなければならぬ」と言われているのです。というも、やがて時が来て、誰もことを行うことができない終わりの日がくるからだと言われるのです。
- ②世の光 (5) 「わたしが世にいる間、わたしは世の光です。」そう言われると、希望がないかのようにも聞こえますが、そうではないのです。イエス・キリ



ストは世にいる間、「わたしは世の光です」と言ってくださっているのです。闇を照らし、明るくする光として、主は世に救いをもたらしてくださるというのです。それでは「わたしが世にいる間」というのは、主が十字架上で死に、復活され、天に昇られた今、時は過ぎてしまっているのでしょうか。いいえ。「わたしは世の終わりまであなたがたをともにいます」(マタイ 28:20)と仰ってくださっているのです。まだ、猶予があります。しかし、安心してはなりません。終わりの時は迫っているからです。

- ③盲人の目に (6~7)「イエスは、こう言ってから、地面につばきをして、そのつばきで泥を作られた。そしてその泥を盲人の目に塗って言われた。『行って、シロアム(訳して言えば、遣わされた者)の池で洗いなさい。』そこで、彼は行って、洗った。すると、見えるようになって、帰って行った。」そして、主イエスはこう言われた後に、地面をつばきで湿らせて泥を作られて、盲人の目に塗られたのです。その上で、言われました。「シロアムの池に行き、洗いなさい」と。シロアムの池はエルサレムの南東部にある池です。盲人は言われた通りに、その池で洗ったのです。すると彼は見えるようになったのです。

3. 信じられない人々 (8~12 節)

- ①物ごいをしていた人 (8~9)「近所の人たちや、前に彼が物ごいしていたのを見ていた人たちが言った。『これはすわって物ごいしていた人ではないか。』ほかの人は、『これはその人だ』と言い、またほかの人は、『そうではない。ただその人に似ているだけだ。』と言った。当人は、『私がその人です。』と言った。」さて、その盲人が、目が見えるようになり、人前に出るようになると周りの人々はいろいろと言いはじめました。「あの人は物ごいをしていた人だ!」「いや似ているだけだ」・・・すると本人が「私は確かに、あの盲人で物ごいをしていた人だ」と言ったのです。
- ②イエスという方が (10~11)「そこで、彼らは言った。『それでは、あなたの目はどのようにしてあいたのですか。』彼は答えた。『イエスという方が、泥を作って、私の目に塗り、『シロアムの池に行き洗いなさい。』と私に言われました。それで、行って洗うと、見えるようになりました。』」盲人の目が見えるようになったということを信じられない人々は尋ねます。「それじゃ、どのように見えるようになったのだ?」すると彼はありのままを伝えます。「イエスという方が、泥を作って私の目に塗り、言われる通りにシロアムの池で洗うと見えるようになったのです。」まさにそれ以上でも、それ以下でもない。彼にとっての真実でした。
- ③私は知りません (12)「また彼らは彼に言った。『その人はどこにいますか。』彼は『私は知りません。』と言った。」すると、彼らはさらに問いただします。それじゃ、その人はどこにいるのだ? それに対しても、彼は嘘偽りなく、「私は知りません」。イエスという方が、見えるようにして下さったことは間違いなく、その人が今どこにいるかはわかるはずもなかったのです。だから「わかりません。」と答えるしかなかったのです。

《結論》 辻井伸行さんというピアニストがいます。彼は生まれながらの盲人ですが、ピアニストとしての実力は超一流で交響楽団などと、多くのコンサートをなさっています。本人と親の苦労と努力は余人の想像を越えています。医者のお父さんは厳しく育てたようです。その父親がインタビューを受け、声をつまらせながら、次のように語っていました。「息子がふともらしたことがあるのです。目が見えないことはいいけれど、もし一度だけ見えるようになるなら、小さい頃から、自分の手足のようになって、共に歩いてくれたお母さんの顔を見たい」。

今朝の記事にある盲人の育ちなどはわかりません。ただ、両親は健在で(18 節)、彼自身は物ごいをして生計を立てていました。3 節にはその両親のことも含めた話になっていて、この人の目が見えない原因が本人や両親にあるかが問われます。こうした考えについては、旧約聖書のヨブ記における友人たちがヨブを責め立てるのに、「このような事態(家族と財産を失う)になったのは、あなたに問題があるからだ」と本人の罪を追及するのです。しかし、主イエスは人間の地上における幸、不幸を越えた、遥かなる神のお考えの中にすべての基があることを語りとしています。人間の側では理解できないことを主はみぞなわしておられるということ、伝えようとされているのです。この記事では、このことが主題ともなると言っても良いと思われそうですが、今回は「わたしは世の光です。」と言われたことに注目し、そのことを以下に考えます。

福音書において、盲人に主がお関わりになった例として、バルテマイがいます。エリコにおいて物ごいをしていたバルテマイは、イエス様が来られたと知ると、「ダビデの子のイエス様、私を憐れんでください。」と叫んだのです。主イエスは、彼を招かれて言われました。「わたしに何をしてほしいのか」。彼は「先生。目が見えるようになることです!」と訴えたのです。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです」。バルテマイは見えるようになりました。

このバルテマイの例と比較すると、こちらの盲人は一方的に主がお関わりくださって、目が見えるようになっていきます。ここでは、盲人の信仰が用いられたのではなく、ただに主のお心によって癒しがなされているのです。そこで、今朝の記事で「わたしは世の光です」と伝えられたことから考えます。私たちがいかに、肉体の目がよく見えたとしても、霊の眼が見えていとはかぎりません。闇の世の支配者である悪霊にゆだねているならば、光である主に照らしていただくかなければ救われません。霊の眼を開けていただくかなければならないのです。その時に、学ばされることは、人が主の前に出させられ、救いに導かれる時には、バルテマイのような必死な求めが用いられることがある一方、今朝のように主ご自身が手を差し伸べてくださることあるということです。私たちが不思議なように導かれてきているわけです。「あなたがたがすぐわかれたのは恵みにより、信仰によるのです」(エペソ 2:8)とありますが、主の大きな恵みによって我々は導かれているのです。「わたしは世の光」と言われる主に罪を照らし出していただき、光の主の導きのうちに救いの確信をいただいでいきましょう。また、この方による、救いをいただけるよう祈っていきましょう。